

日本キリスト教会大阪北教会

正午礼拝

2005年02月23日

『大きな苦難の時』

聖書 マタイによる福音書 24 章 15～28 節 賛美歌 395 454

説教 森田幸男牧師

今日の聖書の箇所の見出しは、“大きな苦難を予告する”となっております。そしてこの大きな苦難については 21 節を見ますと、「そのときには、世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来るからである」とこのように書かれております。その苦難はかつて、今後もないような大きな苦難とされています。そしてずっと語られてまいりまして、最後の 27 節のところには、「稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来るからである」とありまして、稲妻が光り雷が轟く。これは誰も見逃すことはできませんし、聞き漏らすことはできないわけです。そのように人の子も来る、とこのようにイエス様は言われます。

これまで何度も申して来ましたように、「人の子」というのは、イエス様の自称であります。ご自分のことを普通は「わたしは」と言うところを、「人の子は」とこのようにイエス様は言っておられます。「人の子は失われたものを捜し出して救うために来たのである」とおっしゃいました。正にこの一語にイエス様の御業が言い切られていると言っていいようなことも言っておられます。そして聖書の中で、「人の子」というのは、今日は特に冒頭に、「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者」と旧約聖書のダニエル書に言及されているわけですが、旧約聖書、特にダニエル書において「人の子」というのは、終末時（最後の時）における審判者であり、且つ救済者である者のことを言っております。そしてそれはイエス様のことなのです。イエス様の再臨を指すわけです。そして「稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来る」と言われております。そして最後に 28 節には、「死体のある所には、はげ鷹が集るものだ」と言われています。「死体がある所にははげ鷹が集る」というのは、鷹とか鷲というのは高い山に巣を作っていますね。そこで雛を養うためには獣の肉がいります。鷹とか鷲は目が鋭く良いので、死んだ獣がいればそこに急降下して行って、その肉を取って持ち帰って雛を養うということです。そのように「死体のある所には、はげ鷹が集る」というのは、丁度稲妻が光って落雷するように人の子が来るということと重なっていて、しかもその時というのは、死体のある所、或いは悪がはびこり、充満したその時に人

の子は到来するのだと、こういうふうを読むことができます。

先日来、この福音書の23章からずっと読んできた時に私たちが気付いたことは、ここで聖書がイエス様の言葉として語っているものを示しているわけですが、その時に旧約の歴史を初めからずーっと現代に至るまでを見渡して、そういう中からイエス様の言葉が語られているということです。だからスケールが非常に大きいわけです。今日のところでも、「世界の初めから今までなく、今後も決してないほどの大きな苦難が来る」というのは、これは正に最後の、決定的な苦難の時であり、試練の時であり、それはまた、審判の時である。死体がある。悪がはびこる。その時に終わりがやって来る。こういうことが言われているわけです。

今日の箇所を読んでいて、“ああ、これは津波が洪水のことを言っているのだ”と思いました。言われているのは、「預言者ダニエルの言った憎むべき破壊者が、聖なる場所に立つのを見たら 読者は悟れ、」とあり、聖書は当然読者を想定しているわけですね。ここにあるメッセージを受け止めて、受け入れて欲しいということで、この福音書が書かれていることはこういう挿入句でいっぺんに分かります。「読者は悟れ。そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。」預言者ダニエルという人は、旧約聖書にダニエル書がありまして、この人物はイスラエルの青年で、バビロン捕囚のときに若くしてバビロンに連れて行かれた人物として、ダニエル書では描かれております。それは紀元前六世紀の話です。中身はそうですが、実際ダニエル書が書かれた時期は、そんな古いことではなくて紀元前二世紀です。BC 168年に隣国のシリアのアンティオカス・エピファネス王が攻めて来て、エルサレムが陥落するのです。これは歴史の事実です。そしてこのマタイによる福音書が書かれたのは紀元70年代であって、紀元70年にはエルサレムの神殿はローマ軍によって破壊された。これも歴史の事実です。紀元前168年にシリアのアンティオカス・エピファネスがエルサレムを占領するわけです。そこに異教の神の像を建てて、これを礼拝するようにイスラエルの民に強いたのです。そういう歴史の事実があって、そのような事態がまた起こる。「そのときには、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい」と勧められているわけです。

そして17節以下を読みますと、これは洪水が津波のことを言っているということが分かりますね。「屋上にいる者は、家にある物を取り出そうとして下に降りてはならない。畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。」何故なら、津波が迫っているので高台に逃げなければいけないのですが、津波の速さは凄くて時速何百キロで、新幹線の200キロの二倍も三倍もの速さですから、一刻を争うのです。そして家が潰され、そのあたりの全部のも

のと、多くの人が逃げ遅れて波に吞まれるわけです。それは先日のスマトラ沖の地震、津波で見たとおりです。「逃げるのが冬や安息日にならないように、祈りなさい。」冬なら着のみ着のままですぐ早く逃げないと波に吞み込まれるわけです。この間の津波のことで日本から調査団が現地に行って測ったら、津波が一番高い所で47~48メートルに達していたというのです。それでは海岸に近い所のものは全部吞み込まれますね。相当の高台まで波は昇っているということです。ですから、ここの描写は、津波・大波を想定した方が分かりやすいです。

そのような力を持った悪しき者が聖なる場所・神殿に立つときには、逃げなさいという勧めであります。それも一刻を争うということです。そしてそれは死体のある所にはげ鷹が集るわけですから、悪い事がずっと積み重なって、それが満ちる時というのがあるわけです。どんなことでも時が満ちるといふことがあるのです。時が満ちて、出来事が起こるわけです。これは地震でもそうです。何時起こるかはこんなに科学が進んだ時代でも、確実な予知はできませんが、近々起こるだろうといふことは、地球のメカニズムからして地震や津波が起こるといふことも経験上、或いは科学的なことによっても分かっているのです。それが満ちる時というのがあるわけです。その時は確実に起こるのです。地球といふのは地底でそういう仕組みになっているのですから。地震は何十周年周期かに、それははっきり何時かは分からないけれど、時が満ちたら確実に起こるわけです。だからいつもそのことを想定して備えをしておかないといけないということになりますね。歴史の場合もそうなのです。悪い事が煮詰まってきますと、そこに歴史の行き詰まりといふことが起こります。革命という形で起こる場合もありますし、市民革命、民主化という形で起こることもあるのです。独裁者の悪い支配がずーっと続きますと、無理に無理を重ねて脅して治めているわけですから、そういう支配が永遠に続くといふことは絶対にあり得ないのです。人間性がそういう独裁的支配に対しては反逆するのです。けれどもある時期は反逆したくてもできないから皆、我慢して耐えているわけです。けれども時期が来ますと、人間性がそういう非人間的な支配に対して抵抗して、民主化といふことは起こるのです。20世紀は、そういう民主化がいろんな形で起こった時代なんですね。民主化は良いことです。それは悪いことが煮詰まって来た時に起こるといふことです。これは歴史の真実です。これはまた、個人の人生でも言えると思うのです。いろんな悪い習慣が長く続けば、生活習慣病で命を縮めるといふことになるわけです。悪い習慣が続いていると、ある時それは行き詰って人生が駄目になってしまう、といふのは私たち皆が経験しているところです。そういう意味では、何事にも「満ちる時」があるのです。

今日の箇所でもいろんな歴史的な事、天変地異という自然の事、そういうことを踏まえて、結局私たちがどう生きるかという個人の人生の事、そして神様のご計画によるイエス様の再臨のとき、終末の時、そういうことを全部含めて今日の箇所は書かれているということになります。私たちは、キリスト教の教えは、「“因果応報”ではない」と言います。確かに、それを越える神の憐れみ、支配、導きを私たちは信じていますから、単なる因果応報説が最後の基準では勿論ないわけです。けれども、原因があって結果があるというのは、人生の鉄則なんですね。今何事が起こるといえるのは、やはりそこに至る過去があって、今があるわけです。私たちの人生の「今」というのも、過去があって「今」があるのです。そう言う点では、原因があって、経過があって、今結果があるというのは、宗教とか何とか言うよりも、これは人生の鉄則です。地震が起こるのもこれはそのとおりで、時満ちて起こるのです。ですから素直に、単純に因果応報を私たちは受け入れなければならないと思うのですね。

そしてイエス様は、「稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来る」とおっしゃいました。それは悪いことが積み重なる時に、死体にはげ鷹が急降下して降りて来るような形でその時に起こる、というのが一つの形です。今日の箇所は15節から読みましたけれども、その直前の14節にはこう書いていました。「そして、御国のこの福音はあらゆる民への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。それから終りが来る」と。だから、福音がすべての国の民に宣べ伝えられ、証しされる。そういうことが煮詰まった時に終わりが来る。そしてその時は悪しき事が充満した時と合体するわけです。だから「人の子」は「審判者」なのです。悪しきことが裁かれるわけです。そしてその悪しきことの故に苦しめられている人たちが解放されますから、それは救い、救済でもあるわけです。そういうふうに、時の充満ということがあるわけです。

それでこの間のスマトラ沖の地震と津波で30万人を超える死者、行方不明者があり、未だに行方不明者が大勢いるし、死体があっても誰だか確かめられない身元不明者も多くいます。大災害であります。10日ほど前に大阪北教会の会員がインドネシアに旅行に行かれました。現地でも聞いてきた話では、ある村落では全員助かったと。何故全員が助かったかということ、そこではこういう先祖からの言い伝えがあったそうです。「潮が大きく引いたら山へ逃げなさい」という言い伝えがその村にはずっとあったそうです。そして今回の地震、津波では潮がずっと引いて、その後、物凄い津波がやって来たのです。それで山へ逃げた人だけが助かったのです。そこでは昔からの言い伝えが生きていたのです。その村落では昔、村の大方の人が死ぬような津波を経験したのではないのでしょうか。普通に潮が満ちたり引いたり毎日繰り返されていることで

すが、津波の前の引き潮というのはずっと沖まで、普通は遠浅にならない所まで潮が引くわけです。それは異常を表わしているわけですから、その時、魚とか貝を採りに海に入ったらだめなのです。そういう引き潮を見たら、一目散に逃げなければいけないのです。そして実際そうして助かった村落があったそうです。もう一つ、私はテレビで見ましたが、こちらの村に娘さんがいて、離れた村にキリスト教の牧師であるお父さんがいたのですが、娘さんの方に先に被害が起こった。すぐに携帯電話でお父さんに津波の危険を知らせた。その牧師は二百人余りの村人全部に「危険が迫っているから高台に逃げるように」と伝えた。皆すぐに逃げた。5分後に津波が村を襲ったけれども、全員助かったということでした。その牧師は村人に信用されていた人だったのですね。たった5分の間でしたが、全員その牧師の言葉を聞いて、信じて、着のみ着のまま逃げたので、皆助かったということです。これは一人の牧師の言葉を聞くかどうかで、助かるか死ぬかの分かれ道になるわけです。

まして私たちはイエス様のおっしゃる御言葉を本当に信じて、そのように日々生きる。そうでなければ、毎日が本番ですが、それが積み重なって、大きな災害とか大きな苦難とかが起きるのです。だからそれが来てから準備したのでは間に合わないのです。毎日毎日積み重ねて、イエス様の御言葉を聞いて、それを本当に心に宿して生活をする。そういうことの中で勿論津波が来ますし、地震にも遭います。備えを十分していても命も落とすことはあります。けれども私たちがイエス様の言葉を信じるということは、それに従うということは、死んでよみがえられた方の言葉と、その方に結びついているということです。その時に私たちは死ぬということはあるでしょうし、人間は死ぬことは避けられないのですが、津波では助かって、また病気や事故で亡くなるとかで、人生に終わりは来るのです。けれども本当にイエス様の言葉を信じる場合、その言葉と、言葉で約束されていることは、永遠に滅びないとイエス様は言っておられるのですから、それを私たちは聞いて本当に信じるということ、それが津波であれ、最後の審判であれ、どんな過去にも今後もないような大きな苦難、試練と言われているようなことが来ても、私たちが本当にイエス様を信じて、その御言葉を信じて生きているときには、あらゆる試練を越えていくことができるのです。それが今日の個所で言われていることだと言ってよいと思います。

最後にもうひと言申したいのですが、「山に逃げなさい」とイエス様は言っておられますが、いろんな大小様々な試練、そして決定的な試練に私たちは遭遇するのです。これはもう避けられないことです。その場合どうすればよいか。今日の言葉なら「山に逃げなさい」とイエス様は言っておられるのです。津波の場合は現実その通りで、

高い所、山に逃げる。けれども聖書の中で、「山」というのは、神様がご自身を現される場所です。それは「山のように不動な方」というのは、神様、イエス様しかないわけですから、「その方のもとに逃げなさい」ということです。これがあらゆる試練に対する唯一の備えです。この聖書の中で、詩編にしばしば使われることですが、一つ挙げますと詩篇 3 1 編 2 節は、新共同訳では「主よ、御もとに身を寄せます」となっております。前の口語訳では、「主よ、わたしはあなたに寄り頼みます」となっています。でもこれは、「主よ、わたしはあなたの中に逃げ込みます」というのが、文字通りの訳です。山へ逃げるとか、あちこち逃げて、それでも間に合わないで命を落とすということがあります。でも私たちが今ここで、神様に寄り頼み、神様に身を寄せ、神様の中へ逃げ込む。あらゆる試練の時に神様の中に逃げ込む。それだけが、唯一確かな逃れ場、救いなのです。そしてこの 23 章をずっと見てくると、結局、神様に寄り頼み、神様の中に逃げ込むということ、このエルサレムの神殿においても、生活の中でも、この一事がおろそかにされていたのです。だからイエス様は、「この神殿は滅びる。そればかりか、イスラエルの民は滅ぼさせる」と預言されて、それから 3, 40 年後の紀元 70 年にそれは起こりました。イエス様は、当時のイスラエルと民、神殿の姿を見ていて、このまま進めば滅びると預言された。崩壊は火を見るよりも明らかなことでした。或いはイエス様でなくても、ちょっと鋭い人なら分かったことでしょう。

いずれにしても、私たちはイエス様の言葉を本当に信じて、その言葉を真に受けて生きる。そして私たちは準備不足で突然の災害に遭うという事もあります。それは避けたい事で、仕方がないのですが、神様の中に逃げ込むということ、これは最後まで開かれているということです。神様により頼むこと、これが私たちが為すべき唯一の備えなのです。地震対策など勿論しなければいけないのですが、命は尽きます。この命は尽きても、尽きない私たちのその先というのは、神様を寄り頼み、その中に逃げ込む。その時に私たちのこの命というのは永遠に保証されるのです。そういうことをわたしは今日の個所の、イエス様のお言葉を読んでいて思いました。

お祈りいたします。

神様。鷲や鷹がはるか彼方の高みから鋭い目をもって見渡しているように、あなたもすべてを見通す目を持たれて私たちを見通し、また見守ってくださいます。そのあなたを私たちは信じ、ただあなたのみにより頼み、あなたの中に逃げ込む、そのような日々、また私たちの信仰の歩みであらせてください。

この祈り、イエス様の御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン